

非文字史料における聾啞表象および手話言語表象

末 森 明 夫、高 橋 和 夫

1. 序論

不具歴史学（不具史研究）は古代より現在に至る現存文字史料¹および非文字資料²に見られる不具³表象の編輯および通時的考証を図る学問であり、社会的ないし文化的に範疇化され規範性および逸脱性を包含する不具者の身体性、および不具者（被観察者）と健常者（観察者）の動態的關係を考察し、不具史の射程に集合的記憶を捉えることを意図する（Eyler 2010, Goodey 2011, Turner & Pearman 2011, Wright 2011, Metzler 2013, 2016, Scalenghe 2014, 中山1934, 汲田1973, 河野1987, 谷合1996, 花田1997, 松山2011）。このような不具史研究の一環として、日本の聾啞者⁴に焦点をあてた聾啞史研究も展開されている（伊藤1941, 中野・加藤1967, 伊藤1998, 津名2005, 山本2005）。

一方、欧米における不具史研究でも文字史料を題材とした研究が中心を占め、非文字史料を題材とした研究は大きく立ち後れているものの、近年は非文字史料における不具表象の図像学的研究（不具図像学）の蓄積が図られている（Camille 1993, Davis 1995, Bragg 2004, Nishimura 2009, Millett-Gallant 2010, Siebers 2010, Bogdan 2012, Trentin 2015, 伊藤2015）。日本でも中近世非文字史料における少数弱者（minority）表象を題材とした図像学が展開されている（加須也2012）。

しかしながら、非文字史料を題材とした不具史研究の大半は蹙跛⁵表象や瞽盲⁶表象を対象としたものであり、蹙跛表象や瞽盲表象には希薄な不可視性という問題を内包する聾啞表象は等閑視されてきたことは否めない。もっとも、欧米では中近世非文字史料を題材とする図像学的研究が若干ながらも展開されている（Corbett 1979, de Saint-Loup 1993, Bragg 1996）。筆者等はこのような現状を憂え、日本における近代初期以前の非文字史料における聾啞表象⁷や手指表象⁸を編輯し、聾啞史研究の多元

1 本稿では「文字史料」は主に文献を指すものとする。

2 本稿では「非文字史料」は主に絵画や挿絵、彫刻、動画など文字史料に範疇化されにくい史料全般を指すものとする。

3 本稿では主に近世以前の文字史料および非文字史料を扱うことより、原則として「障害（者）」という語は用いず、「不具」という語を用いるものとする。

4 本稿では原則として「聴覚言語障害（者）」という語は用いず、「聾啞」という語を用いるものとする。

5 本稿では原則として「肢体不自由（者）」という語は用いず、「蹙跛」という語を用いるものとする。

6 本稿では原則として「視覚障害（者）」という語は用いず、「瞽盲」という語を用いるものとする。

7 「聾啞表象」は現在で言う聴覚障害および言語障害（あるいは発声障害）を合併したものであり、厳密には聴覚障害のみに基づく「聾聵表象」と発声障害のみに基づく「瘖瘖表象」に区別すべきと言う課題は残るものの、本稿では便宜的に「聾啞表象」という語を用い、必要ときは「聾聵表象」ないし「瘖瘖表象」という語を用いるものとする。

8 「手指表象」は元来手指媒体を介する表象全般を指し、後述する「手話言語表象」を内包するものであるが、本稿では「手指表象」と「手話言語表象」を区別して用いる。

的展開に資することを試みてきた（末森2012, 2013a, 2013b, 2013c, 2016a, 2016b, 高橋2013, 2014）。本稿では図像学（iconography）・図像解釈学（iconology）を視軸とした聾啞表象の解析に関する筆者等の発表要旨や論文の再整理することにより、筆者等の非文字史料系聾啞表象の地平の可視化を図るものとする。

2. 聾啞表象

2.1. 聾啞表象の不可視性

中世後期西欧のフランドル絵画は精密な描写により、不具図像学に多大な寄与をなしてきた（Dequeker 1977, Karcioğlu 2002, Keeman 2011）。伝⁹Bosch（1450～1516）作《乞丐》¹⁰は不具乞丐を多数描いた作品として知られている（図1）。Dequeker（2001）はこの作品に描かれている31人の乞丐の不具属性を検証し、癩の他に麦芽症による後天的蹠跛も少なくない他、いわゆる偽蹠跛も含まれている可能性もあることを明らかにした¹¹。ただ、この乞丐群像には明らかに聾啞者と思われる人物は含まれていない。



図1 伝Bosch《乞丐》¹²

フランドル絵画の代表的画家であるBruegel the elder（1525～1569）は、不具者を主題に据えた寓意画（《足なえたち》（図2a）、《盲人の寓話》（図2b））、ダウン症と覚しき人物が描かれている《バベルの塔》（図2c）、更には多数の不具者が描かれた群衆画（《謝肉祭と四旬節の喧嘩》（図2d））を物している。しかし、《謝肉祭と四旬節の喧嘩》では少なくとも9人の蹠跛と2人の盲が描かれているものの、聾啞者と思しき人物は見当たらない（図2e）。Bruegel the elderの作品の中で強いて聾啞者が描かれているものと覚しきものを挙げるとすれば《One begs in vain at the door of the deaf, from twelve Flemish proverbs》が挙げられる（図2e）。しかし、この版画は諺を主題とする寓意画の一部として描かれたものであり、版画の中に書かれている諺がなければ扉の前に立っている人物が聾者であることは窺い知れない。

9 Pokorny (2003) .

10 本稿では可能な限り類義語並列構造による連辞複合語を用いることが望まれるとの観点より、文献に「乞食」と書かれているもの以外は「乞丐」という語を用いる。

11 中世後期西欧における蹠跛である乞丐には当時、癩や梅毒以外に麦芽病によるものも少なくなかったものの、中世日本では麦芽病患者は皆無に近い状況であったものと考えられており、中世社会の非人（乞丐）層における相違点を見いだすことができる。

12 *Beggars and Cripples, Type* : Pen and bistre Size : 264 x 198 mm, Location : Bibliothèque Royale Albert I, Brussels (ベルギー王立図書館蔵)。

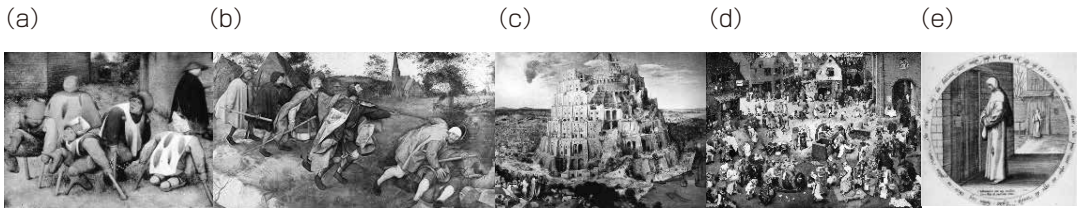


図2 Bruegel the Elderの作品に見られる不具表象 (a)《足なえたち》(1568), (b)《盲人の寓話》(1568), (c)《バベルの塔》(1563), (d)《謝肉祭と四旬節の喧嘩》(1559), (e)《One begs in vain at the door of the deaf, from twelve Flemish proverbs》(1559)。

版画集《タブロー・ド・パリ》¹³は19世紀前半のパリの情景を描いたものとして知られている(佐藤1985)。この版画集には不具者を描いたものも載録されている(図3a, 3b, 3c)。ただ、図3cは当時のパリ聾啞学校の模擬授業の様子を描いたものではあるものの、多数の人物のうちどれが聾啞者なのかは判別しがたい。



図3 《タブロー・ド・パリ》における不具表象 (a)《シャンジュ橋の乞食たち》, (b)《キャンズ=ヴァン救済院の盲人たち》, (c)《パリ国立聾啞学校》。

2.2. 聾啞表象の可視化

不可視性を内包する聾啞表象を前景化・可視化するための方策としては、(1) 聾啞図像にその図像が聾啞者であることを示す文字資料を添える(境界テキスト性)、(2) 聾啞図像にその人物が聾啞者であることを示すもの、すなわち持物的要素を持つ物を描き加えるか、聾啞を寓意し得る象徴や符牒を採る(間テキスト性)、のいずれかが考えられる(Allen 2011)。しかしながら、聾啞であることを含意する象徴や符牒はともすれば通時的な変質を伴いがちでもある。通時的な変質は聾啞象徴ないし符牒が当時は社会において共有認識されていたものの、時代を経ると共に共有知識が失われることにより、現在の鑑賞者が近世以前の非文字史料に描かれた聾啞象徴ないし符牒の含意を正しく理解することができない可能性もある。

13 ギョーム・ド・ベルティエ・ド・ソヴィニー(著)・ジャン=アンリ・マルレ(画)・鹿島茂(訳)(1993)『タブロー・ド・パリ』東京:藤原書店。原本は1821年から1824年にかけて刊行された。

2.2.1. 境界テキスト性

図4 a¹⁴に挙げる一枚の肖像画は16世紀の聾啞者の上半身を描いているが、この人物が聾啞者とわかるのは、肖像画の下に「John Gale」という本名と共に「Dumb Jack」という渾名が書かれているからである。現在の観察者はJohn Galeという人物の経歴などは詳しくはわからないものの¹⁵、この人物が聾啞者であることを肖像画の下にしたためられた文字により知ることができる。このような文字文脈と非文字文脈の相互作用は境界テキスト性の一例と見なし得る。また、『カンタベリー物語』に収録されている「バースの女房」における語り部は片耳が聾（あるいは難聴）という設定になっており、写本にもバースの女房の肖像画が描かれている（図4 b）。しかし、この肖像画も図像のみでバースの女房が片耳聾であることを知る術はない。いわば、「聾」ないし「啞」という表象は「蹙跛」や「瞽盲」といった他の表象に比べると、境界テキスト性が多分に前景化されている傾向があるものとも考えられる。

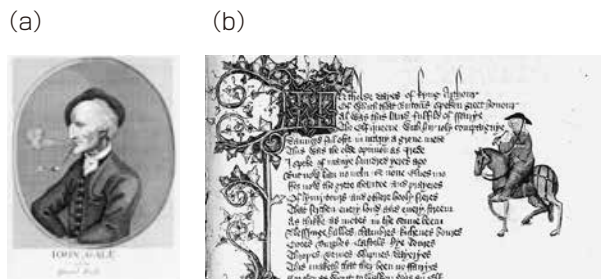


図4 (a) 《John Gale, Dumb Jack》, (b) 『カンタベリー物語「バースの女房」』¹⁶。

江戸時代後期より明治時代中期にかけて、様々な表情をした顔を描いた百面相本（江戸）・顔づくし本（上方）¹⁷が刊行され人気を博した（武藤1997）。多岐に渉る百面相本・顔づくし本の中には不具者を描いたものも少なくなく¹⁸、現在とはまた異なった世相が窺われる。図5に挙げた聾啞図像はいずれも不具の種類が崩し文字で書かれており、典型的な境界テキスト性を示している。

《三十二相追加百面相》の「啞」の女性は、右手で「男」を示し、左手で「男」を指しているものと考えられる（図5）。

14 Artists identity is taken from, J.C. Smith 'British mezzotinto portraits', London 1883, vol. 1, p. 286

15 James Caulfield (1819) John Gale, alias Dumb Jack, *Portraits, Memoirs, and Characters, of Remarkable Persons: From the Revolution in 1688 to the End of the Reign of George II: Collected from the Most Authentic Accounts Extant*, volume 1, 25-27.

16 *Ellesmere Manuscript*, Huntington Library蔵

17 『写生百面叢(1840)』、『百色面相(1841)』、『百面相仕方ばなし(1842)』、『戯画笑百面(1843)』、『延喜吉相百面双六(1844~1847)』、『妙名異相胸中五十三面(1848~1854)』、『三十二相(1877)』、『三十二相追加百面相(1877~1890)』、『狂句百面相(1883)』、『滑稽百人面相競(1890)』など。

18 『写生百面叢』座頭に熱湯17ウ、『凡夫癖物語』按摩とりの癖13オ、仕方ではなしをする癖17オ、『顔づくし落ばなし』まぬけの顔2、軽薄の顔14、微毒の顔15、『大笑顔づくし』めくらのひとりごと3、つんぼのひとりごと3、啞のひとり思ひ10、いざりのひとりごと10、でぼちんのひとりごと11、みつちやのひとりごと11、白ひじまん黒ひじまん女の喧嘩12、『狂句百面相』どもり10ウ、近眼23ウ、聾つんぼ24オ、啞おふし32ウ、馬鹿46オ、『滑稽百人面相競』瞽女の相2ウ、近目の相3ウ、つんぼの相3ウ、馬鹿の相4オ、座頭の相7ウ。



図5 百面相本・顔づくし本における聾啞表象 (a)『百面色相』「聾」、(b)縁喜吉相百面双六「聾」、(c)《当世見立百面相》「聾」、(d)『大笑い顔づくし』「つんぼのひとりごと」(3)、(e)『大笑い顔づくし』「啞のひとり思ひ」(10)、(f)『三十二相』「聾」、(g)『三十二相追加百面相』「啞」、(h)『狂句百面相』「聾」(24才)、(i)『狂句百面相』「啞」(32ウ)、(j)『滑稽百人面相競』「つんぼの相」(3オウ)。

2.2.2. 間テキスト性

キリストが盲、啞者を治したという奇蹟や聖ヤコブの奇蹟に代表されるような「奇蹟」を描いた中世西欧非文字史料は多数ある(図6)(de Saint-Loup 1993)。このように非文字史料を観察するにあたり、文字史料を始めとする様々な資料より得られる情報により、非文字史料に新たな情報を付与し得る過程を間テキスト性と位置付けることができる。



図6 タイル画《キリストの奇蹟》
カーリ工博物館所蔵



図7 肖像写真《杉敏三郎》¹⁹⁾

一方、近代初期(明治時代)の聾啞者を撮った肖像写真は少なからず残されている。日本における現存最古の聾啞者肖像写真と思われる杉敏三郎の肖像写真を図7に示す(伊藤1941, 岡村1989)。この肖像写真は写真の裏に本人の氏名が書かれているが、その文字史料以外に私達は写真に写っている人物が聾啞者である事を知る術はない。杉敏三郎が吉田松陰という有名人の弟であり聾啞者であったという情報を得るためには、吉田松陰の書簡を始めとする様々な文献にあたる必要がある。このような事例も典型的な聾啞表象の可視化における間テキスト性の前景化にあたる物と言えよう。

19 松陰神社(山口県)所蔵

2.3. 単独性と特殊性

2.3.1. 古代・中世・近世西欧の聾・聾啞画家

古代の啞画家として知られているQuintus Pedius (図8a) の肖像画は口に布を巻いており、これは当時の聾を示す消長になり得たものとみられる。口に布を巻いた聾者の絵は『ウタ福音書』(1025年頃)にも見られる(図8b)。

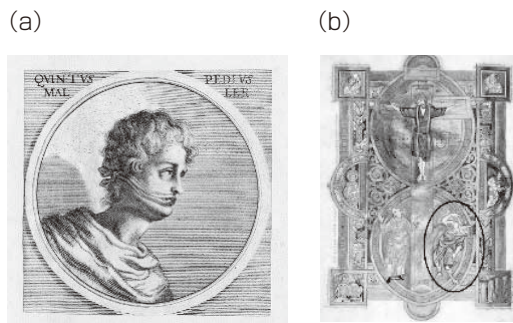


図8 古代の聾者 (a) Quintus Pedius (?~43BC)²⁰, (b)『ウタ福音書 (Uta-Evangelistar)』に描かれている聾者像²¹

しかし、中世中期より近世中期における聾ないし聾啞画家(計7名)の自画像(図9)からは画家本人が聾者ないし聾啞者であることを窺い知る術はない。これらの自画像に示される表象は選れて聾聾表象における「単独性」が前景化されており、聾者ないし聾啞者であることを示唆する「特殊性」は後景化ひいては不可視化されているものと見なし得る。



図9 中近世西欧の聾・聾啞画家の自画像 (a) Bernardino di Betto Betti (1452~1513 イタリア), (b) Juan Fernández de Navarrete (1526-1579 イタリア), (c) Hendrick Avercamp (1585~1634 フランドル地方), (d) Wolfgang Heimbach (1615~1678 プロシア), (e) Johannes Thopas (1625~1700 オランダ), (f) Sir John Gawdy (1639~1709 イギリス), (g) Francisco José de Goya y Lucientes (1746~1828 スペイン)。

20 <http://www.theprintscollector.com/Article/Antique-Portrait-Print-QUINTUS-PEDIUS-Sandart-1675>. Antique Portrait Print-QUINTUS PEDIUS-Sandart-1675. Author and Artist: Joachim von Sandart der Alte. This plate engraved by Philipp Kilian (1628-1693).

21 ドイツ・バイエルン州立図書館蔵 Clm 13601 fol.3v <https://www.bsb-muenchen.de/benutzung-und-service/lehrrmaterialien-fuer-schulen/uta-evangelistar/>

2.3.2. Reynoldsの自画像および肖像画

Joshua Reynolds (1723~1792) は英国美術アカデミーの初代会長を務めた高名な画家でもあり、たくさんの自画像を残している (図10)。自画像が描かれた年齢は10代から晩年の70代まで長期間にわたるが、図10に示す自画像以外の自画像では描かれた人物が聾者であることを示唆する描写は見られない。図10ではReynolds (当時52才) は左耳に左手を添えており、これは自身が聾者であることを示唆する描写と見なす見解が出されたものの、これに異を唱える論文も出ている (Rather 1993)。



図10 自画像 (1775)

一方、後年描かれた肖像画ないし群像画にはReynoldsが当時の補聴器を用いている様子を描いたものがある (図11)。この版画ではReynoldsだけが描かれているのではなく、数多の人物の構成員として描かれている。このような数多の人物が描かれている絵画では誰が誰であるのかをより判別しやすくするために特殊性が前景化される傾向が顕著になり、Reynoldsの場合は聾ないし聴覚障害という特殊性に焦点があてられたものとも考えられる。他者が描いた版画にはReynoldsが聾者であることが前景化されている一方、Reynolds自身が描いた自画像には自身が聾者であることが後景化されているという対照は、当時の聾者の自我における単独性と特殊性のゆらぎを類推する上でも興味深い事例となり得る。集団表象における聾聵表象の特殊性の前景化の事例と見なすこともできよう。



図11 Reynoldsの肖像画 (a) 《The Royal Academy of Arts Instituted by the King in the Year 1768》(1773) Detail of engraving by Earldom after Zoffany. Notice Hunter standing to the right of centre ensuring the model is being correctly posed. (The Hunterian GLAHA 17442) , (b) (a) の拡大図, (c) 《Sir William Chambers; Joseph Wilton; Sir Joshua Reynolds》(1782) , (d) 《A Literary Party at Sir Joshua Reynolds》(1848) .

2.4. 持物

前項ではReynoldsが描かれている絵画では補聴器がReynoldsの聴覚障害という属性 (特殊性) を前景化する機能を果たしているとの考察をおこなった。確かに、補聴器は聴覚障害という特殊性を前景化する機能に優れており、多くの図像が残されてい

る（図12）。本節では補聴器以外に聴覚障害を寓意する持物としての機能を果たし得るものがあるのかどうか、文字史料および非文字史料に即して検証を試みる。



図12 An earliest hearing aids²²

2.4.1. 聾札／啞札

文字史料には聾札（つんぼふだ）に関する記述が散見される。例えば、小林一茶は「つんぼ札首にかけつつ寒念仏」という句を残している²³。関根（1925）は江戸時代後期に活躍した画家、大石真虎が失聴した後「つんぼ」と書いた聾札を用いた様子を述べている²⁴。

一方、高橋（2013, 2014）は聾札が描かれた非文字史料を網羅的に緝輯し、聾札の持つパラテキスト的持物機能を検証した（図13a, b, c）。聾札は文字を伴っておりパラテキスト性が濃厚に反映されたものでもある。そういう意味では厳密な意味では持物とは言えないものの、持物的機能を併せ持つものと見なすこともできよう。

また、伊藤（1941）は歌舞伎《三人片輪》の啞役が「おし」と書かれた札（啞札）を掛けている図像を紹介している（図13d）。

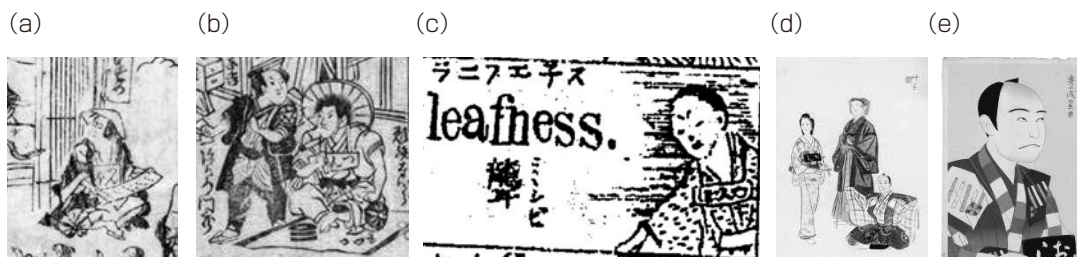


図13 聾札の図像 (a) 歌舞伎《杜若色艶紫》番付(1815)²⁵, (b) 歌舞伎《杜若色艶紫》番付(1815)²⁶, (c) 《聾》『英語独学 通弁自在正則画引』（鳥井1887）, (d) 歌舞伎《三人片輪》(伊藤1941), (e) 《坂東三津五郎の三人片輪の啞》(山村耕花1922)。

22 In the 16th Century, hearing aids were described in the work *Magia Naturalis* (Magic in Nature) . They were hearing horns shaped like the ears of animals known to have sharp hearing, which was thought to gather sound better. quoted from <http://www.thebrainydeafsite.com/-p2.html>

23 小林一茶（1934）「つんぼ札首にかけつつ寒念仏」『一茶名句集』東京：文進堂書店，263。 http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1032569_144/155_131/155コマ

24 関根只誠（編）（1925）「大石真虎」『浮世絵百家伝』東京：六合館，129-132。

25 江戸時代中期に演じられた歌舞伎《杜若色艶紫》で雁哲（役名）が偽聾を演じる際「つんぼ」と書かれた札を首に掛ける様子が番札に描かれている（図13a, b）。早稲田大学演劇博物館所蔵。 http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/ref/banzuke_nas/middle/ro22-00046/ro22-00046-013.jpg

26 早稲田大学演劇博物館所蔵。 http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/ref/banzuke_nas/middle/ro23-00001/ro23-00001-04/ro23-00001-0406-006.jpg

藤本(2014:178)は幕末ないし明治時代初期のものと見られる絵巻物《天保物貫集》を紹介し、この絵巻物には〈つんぼ〉と〈をし〉が載録されていることを明らかにした²⁷(図14)。また、《天保物貫集》に描かれている〈をし〉は「をし」と書かれた啞札をかけてはいない(図14b)。確かに歌舞伎《三人片輪》を題材とした非文字史料(図13d, e)以外に啞札を描いた非文字史料は見つかっていないことより、啞札が本当にあったかどうかについては後考が俟たれる。



図14 《天保物貫集》(a)〈つんぼ〉, (b)〈をし〉。

2.4.2. 椀叩

一方、絵巻物において蹠躰表象および瞽盲表象を描写するときの記号化にはさしたる問題はないと言ってよい。しかしながら、聾聵表象を描写するときは、外見からは聾聵という事象を可視化することに大きな困難が伴うため、何らかの記号化が必要になる。そのため提喩として椀を叩く乞丐が啞であるという記号化をおこなった可能性も考えられる。《天保物貫集》に描かれた〈をし〉も文字によるパラテキスト性が明確に反映されているにも関わらず、椀を叩く人物として描写されたあたりに「椀叩」の啞としての記号化の可能性が仄見える。今後は「椀叩」の啞としての記号化が明確に認められる非文字史料の編輯をおこなうことが望まれよう。

本稿では非文字史料に見られる「啞乞丐」および「椀叩」を焦点化し、両者と聾聵表象の間における間テキスト性およびパラテキスト性を考証することにより、非文字史料における聾聵表象に関する知見に寄与することを試みる²⁸。

近代初期以前の俳句には啞乞丐に関する記述が散見される。例えば、小林一茶(1763~1828)は「時雨れるや親椀叩く啞乞食」という俳句を詠んでいる(小林1934:236,

27 《天保年代物貫集》には「無言の行」や「寒念仏」の図像も載録されている(藤本2014:178)。

28 イコノロジーにおけるアトリビュート(持ち物)研究は数多あるが、キリスト教と仏教との類似比較は物語分析が主流で、図像ははまだ未開拓 http://lartte.sns.it/ripa/iconologia_db/dettagli_lettera.php?id=a <https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8F%E6%95%99%E3%81%A8%E3%82%AD%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%E6%95%99>

伊藤1998:98)²⁹。正岡子規(1867~1902)は『癩祭書屋俳話』³⁰で「ひもじさに破れ椀叩く乞食のをかしさよ」という読み人知らずの句を輯録し、『俳句稿』³¹では自身の「椀叩だまつて行くは唾なるか」という句を輯録している。「時雨れるや親椀叩く唾乞丐」という句では唾乞丐と椀叩きの関連性が窺われるものの、「椀叩だまつて行くは唾なるか」という句では乞食が唾であることが、椀叩きという行為自体よりも「だまつていく」という行為により強く示唆される形になっている。『俳句稿』には「聾の絵師おとつれん冬籠」という俳句も載録されている(正岡1898)。明治31年に詠まれた句ということ、その頃正岡子規は東京にいたということからして、東京盲唾学校出身の聾絵師である可能性が高いものの、正岡子規は聾唾者に会ったことが窺われる俳句ではある。正岡子規の句集からは正岡子規自身が「聾」と「唾」の違いを弁えていたことすら窺われる。もっとも、それは明治時代知識人に限ったものではなく、当時の世間においても「聾」と「唾」の違いは常識の類に属するものであったのであろう。そういう認識が急速に廃れていったのは昭和時代中期以降か。

非文字史料の場合、江戸時代中期の類書『和漢三才図会』(寺島1712)の見出項目「瘡痘」の挿絵に「椀を叩く唾乞丐」が描かれている(図15a)。この挿絵は『聾唾年鑑』(藤本1935)、『聾唾秘史』(伊藤1941)、『歴史の中のろうあ者』(伊藤1998, 100)を始めとする様々な聾唾史関連文献で紹介されており、近世以前の聾聵表象を代表する史料として扱われている(図2)。一方、『和漢三才図会』の見出項目「乞食」の挿絵に描かれている乞丐は椀を叩いてはおらず、椀を差し出す形で描かれている(図15b)。(伊藤, 1941)。この図像に立脚し、椀叩きが聾唾表象の寓意を示し得る持物(attribute)と見なすこともできないわけではない。

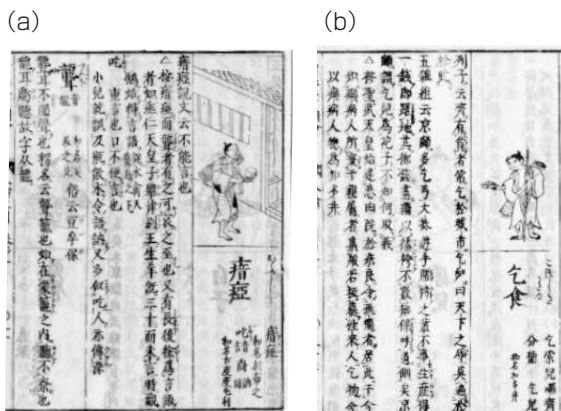


図15 『和漢三才図会』(a)「瘡痘」、(b)「乞食」。

29 『一茶名句集』(1934) p236 http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1032569_144/155 時雨れるや親椀たたく唾乞食
 30 正岡子規(1892)『癩祭書屋俳話』東京:日本新聞社。国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/875217>
 31 正岡子規(1898)『俳句稿』(自筆版) http://www.webmtabi.jp/201001/photos/shaikukou_m31_005_m_31_057photo.html 『子規全集』3巻(正岡1926, p522) http://www.webmtabi.jp/201001/books/complete_works_shiki-ars_3_269.html

しかし、椀叩きは決して啞者に限定されたものではなく、中世の芸能において普通に見られるものであり、椀に該当するものも「ささら」等多岐に涉っている（澁沢、1984）。従って、図15aに示すような椀叩きをする乞丐が総て啞者であるとは言えず、椀叩きをする乞丐の中には聾啞者もいたと見なすのが妥当である。おそらく当時は椀叩きをする乞丐が実際に音声言語を話しているかどうかで聾啞者であるかどうかを判断し得たのだらうとも考えられる。

2.4.3. 《一遍聖絵》

《一遍聖絵》³²は時宗の創始者、一遍（1239-1289）の生涯を描いた絵巻物であり、鎌倉時代後期の1299年に成立したものとみられている。この絵巻物には多くの乞丐や非人が描かれており（砂川2007, 2013）、伊藤（1998, 60）も《一遍聖絵》に描かれた乞丐非人に言及している。

《一遍聖絵》「市屋道場における踊り念仏」（巻7第28段）は特に乞丐非人が多く描かれている図柄として知られているが、その中に口を一文字に結んで椀を叩く乞丐が1名見られる（図16a）。

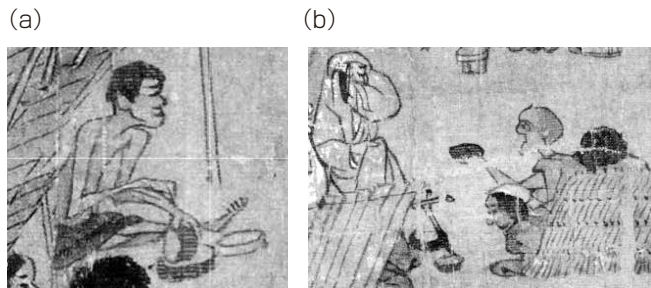


図16 《一遍聖絵》乞丐図像 (a)「市屋道場における踊り念仏」（巻7第28段）、(b)「桂」（巻7第29段）

この乞丐の描写に関する解説には次のものがみられる。

『日本絵巻大成〈別巻〉一遍上人絵伝』（小松1978：196）

もしもし、そこな坊さま、ちょとお恵みを、お恵みを、と、空の椀をたたきながら、わめくやせっぽ乞丐。

『一遍聖絵新考』（金井2005：161）

三人とも五体満足の健常者らしく、痩せてはいるが、頭髪が黒々としており、年齢も三十歳台であろう。地べたに両足を投げ出して座った男が、曲げわっぱのような空の椀を叩いて、通りすがりの僧や市女笠に物乞いしている。

32 小松茂美（編）『日本絵巻大成〈別巻〉一遍上人絵伝』（1978）東京：中央公論社

中世日本の絵巻物に描かれた人物の口の開け閉めにまで厳密な描写を求めるのは穿ちすぎという見解もあることはいうまでもない。ただ、「桂」（巻7第29段）の図柄にも多くの乞丐非人が描かれており、その中に明らかに口を上げて（わめいて）通りすがりの人に物乞いをしている乞丐と見受けられる描写がある（図16b）。図17に示す腕を叩く乞丐が腕を叩きながら声を出して通り過ぎの層や市女笠に物乞いをしたのであれば、口もあけて描くのが自然であるものと見なすことも可能であろう。また、『一遍聖絵』に描かれている数多の乞丐のうち、腕を叩いている乞丐は1名のみである。すなわち、口を一文字に結んで腕を叩く乞丐は唾乞丐である可能性もないではない。

唾竹

先述の歌舞伎《三人片輪》では唾役を務める役者は唾札の他に「唾竹」と呼ぶささらに似たものを用いているが、これは安土桃山時代ないし江戸時代最初期に描かれたものとみられている若衆歌舞伎《三人片輪》を描いた絵にも描かれており（図17）、中世後期には唾竹と呼ばれるものが存在したらしいことが窺われる（永井2002：140）。



図17 屏風絵
《三人片輪》³³

「鉢叩きと聾（ツンボ）」と「腕叩きと唾（オシ）」

〈をし〉は、蓬髪および乞丐の風体で腕を叩いているようにも見受けられる（図2）。この人物が腕叩であるかどうかは議論の余地が残るが、この人物が持っている物は明らかに腕ではなく鉢であることから、唾乞丐と見なしても差し支えはないものとも考えられる。一方、〈つんぼ〉は鉢叩の装いで描かれており、乞丐とは見なし得ないものとも考えられる（澤田2004）。

また、〈つんぼ〉は「つんぼ」と書かれた札（聾札）を首にかけている（図3）（藤本2014）。聾札と唾札については、聾札に言及した近世以前の文字史料及び非文字史料が現存するのに対し、「をし」と書かれた札（唾札）は明治時代中期以降に上演された歌舞伎演目《三人片輪》以外には見られない。近世以前に実在したのは聾札のみであり唾札は実在しなかった可能性もあるが、この件については後考を俟ちたい。

「唾乞丐」と「腕叩」の関係は「換喩」と見なすことで桶？「提喩」と見なすにはちょっと無理があると思う。『和漢三才図会』に見られる「瘡瘻」挿絵と「乞丐」挿絵の違いをどう論じていくか。「腕叩」と「鉢叩」が混同されている面も多分にある。とりわけ「腕叩」は「腕叩」に比べると、「唾」としての記号化がより前景化されていると見なしても差し支えないのかも知れない。少なくとも『和漢三才図会』の場合、そのように解釈し得る。『和漢三才図会』「乞丐」挿絵は『和漢三才図会』の範とされる『三

33 個人所蔵。

才図会』「乞丐」に酷似している。一方、『三才図会』には見出し項目「瘖瘂」は存在せず、『訓蒙図彙』にも見られない。『和漢三才図会』「瘖瘂」挿絵の淵源を求める作業も試みられて然るべきであろう。『人倫訓蒙図彙』では椀叩や鉦叩を含む様々な芸能系非人たちが描かれている。こういう「叩系統」非人と、「乞丐」の関係も今後の課題であろう。いわゆる「叩き」系統勧進における「物言わず」の前景化における「聾聵（啞）」という間テキスト性の有無が、勧進における聾聵表象の本質になるのだろう。

2.5. 寓意

2.5.1. オスマン帝国の啞廷臣

オスマン帝国の宮廷には啞廷臣が多数いたことが知られており、啞廷臣を描いた絵画史料も少なからずある（図18）。『Râlamb Costume Book』には120人にわたるオスマン帝国の廷臣たちの全身像が描かれているが、このうち2名は啞者を意味する[Mute]が添え書きされている（図18c, d）。この添え書きにより、2名が啞者であることが窺い知れるものの、添え書き以外に該当人物が啞者であることを示唆する描写（寓意ないし符牒）があるかどうかを検証することは聾聵表象論の拡充を図る試みとして意義があるものとも考えられる。そこで、120人（全身像）の両手ないし片手の手形の分布状況を調べてみた（表1）。2名の啞者を除く118名の手形は[a/s], [te (Japanese fingerspelling)], ないし[d]のいずれかであった。一方、啞者2名のうち、1名の左手手形は薬指のみを折り曲げた形であり（図18c）、もう1名の左手の手形は中指と薬指のみを折り曲げた形であった（図18d）。一方、図18aは左手で図18cと同じ手形を示し右手は[te (Japanese fingerspelling)]の手形で口を押さえている。すなわち、右手が「啞」を寓意する手指符牒であり、左手の手形が「聾」を寓意する符牒である可能性も考えられる。



図18 オスマン帝国啞廷臣の図像 (a) 『Life in Istanbul』 (1588) ³⁴, (b) 『Middle Eastern Costume』 (1620) ³⁵, (c) 『The Râlamb Costume Book』 (1657) ³⁶ f.35, (d) 『The Râlamb Costume Book』 (1657) f.94, (e) 『The history of the present state of the Ottoman Empire』 (1686) ³⁷, (f) 『Ottoman military figures』 (1703) ³⁸.

34 Bodleian Library (ed.) (1977) 『Life in Istanbul, 1588 : Scenes from a Traveller's Picture Book』.

35 British Library所蔵.

36 Claes Râlamb (1657) 『The Râlamb Costume Book』

37 Sir Paul Rycaut (1686) 『The history of the present state of the Ottoman Empire』, C. Brome.

38 Caspar Luyken (1703) 『Ottoman military figures』

表1 『 』における手形の分類

人物番号

両手に物を持っている人物						40	
						40	3, 4, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 17, 19, 23, 25, 26, 29, 30, 37, 44, 46, 48, 55, 56, 62, 65, 68, 69, 71, 76, 86, 89, 97, 99, 102, 103, 105, 112, 125, 127, 131, 134, 135.
両手を組んでいる人物						5	
						5	28, 52, 70, 74, 128.
片手に物を持っている人物						42	
左 [a/s]	左 [te/ho]	左 [d/g]	右 [a/s]	右 [te/ho]	右 [d/g]		
			9	8	4	9	8, 22, 36, 43, 45, 67, 101, 113, 129.
						8	1, 31, 39, 47, 50, 96, 104, 122.
13						4	18, 24, 33, 136.
	7					13	6, 7, 42, 49, 51, 64, 66, 73, 81, 93, 95, 108, 117.
		0				7	16, 27, 32, 54, 61, 72, 84.
						0	
						1	115.
両手を前に出している人物						7	
左 [a/s]	左 [te/ho]	左 [d/g]	右 [a/s]	右 [te/ho]	右 [d/g]		
		*			*	3	21, 77, 98.
*					*	1	58.
*				*		1	74.
	*				*	1	126.
					*	1	35.
両手を下に置いている人物						8	
左 [a/s]	左 [te/ho]	左 [d/g]	右 [a/s]	右 [te/ho]	右 [d/g]		
	*			*		2	5, 75.
		*	*			1	34.
*					*	2	53, 63.
*			*			3	57, 106, 114.
片手を前に、片手を下に置いている人物						18	
左 [a/s]	左 [te/ho]	左 [d/g]	右 [a/s]	右 [te/ho]	右 [d/g]		
*			*			5	2, 12, 111, 123, 132.
		*	*			5	20, 38, 80, 110, 116.
*				*		4	40, 78, 119, 120.
*					*	2	41, 60.
		*		*		1	59.
				*		1	94.
[a/s]	[a/s]					8	
[a/s]	[te/ho]					5	
[a/s]	[d/g]					11	
[te/ho]	[te/ho]					2	
[te/ho]	[d/g]					2	
[d/g]	[d/g]					3	
Others						2	
						33	

現在のネパール聾者協会のロゴは薬指のみを折り曲げた手形を意匠としており（図19a）、ネパールでは聾者を寓意する手指符牒として幅広く用いられている（図19b）。此の手形は『Rālab Costum Book』に描かれている聾者2名のうち1名に見られる手形（図x）と同じであり、『Rālab Costum Book』に見られるこの手形（図18c）も聾者であることを示す符牒として用いられている可能性がある。

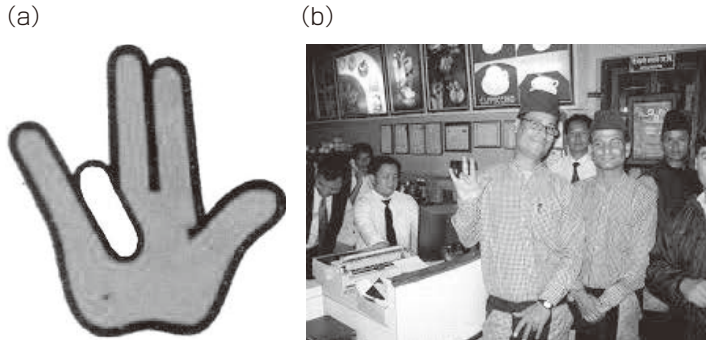


図19 (a) ネパール聾者協会のロゴ, (b) 手指符牒を表すネパール人聾者。

『Rālab Costum Book』に描かれた120人の人物には名は描かれておらず、啞者のように、それぞれの人物の属性が記されている。すなわち、この画集における人物群においては単独性の後景化および特殊性の前景化が諮られると共に、特殊性が顕現化された聾聵表象が可視化されることになったものとも見なすことができよう。一方、図xにおいても、すべての啞者が例の手形を示しているわけではなく、「聾」ないし「啞」を寓意する手指符牒も絶対的なものではなく、観察者（描写者）および被描写者の恣意性により表出の有無が左右されることも見て取れる。

指文字・チョーサーの指文字

Bragg (1996) は『カンタベリー物語』をしたためたチョーサーの肖像画に描かれている指文字と思しき寓意について論じており、指文字による聾啞表象の可視化と指文字以外の聾啞象徴を寓意する手指符牒の関係についても後考が俟たれる。



図20 Geoffrey Chaucerの肖像画（Thomas Hoccleve manuscript）

2.5.2. 対面

中世西欧の医学書『De arte phisicali et de cirurgia』には様々な病気に関する説明と共に挿絵が描かれているが、聾表象は対面型式で描かれている（図21a）のに対し、啞表象は一人の人物のみが描かれている（図21b）。

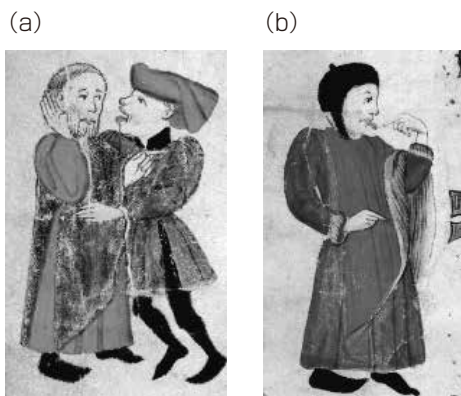


図21 医学書『De arte phisicali et de cirurgia』 (a) 聾, (b) 啞

葛飾北斎が江戸時代後期に描いた『画本早引』（永田, 2011）の見出し項目には聾、盲、聾を始めたとする不具者に関する語彙があり、それぞれの見出し語に該当する挿絵が描かれている（図22a, b, c）。「膝行」の挿絵は肢体不自由者のみを描いており「観察相」に留まっているものと見られる。「盲」は琵琶法師のみを描いており、「観察相」に与する提喩的図像と考えられる。また、「膝行」における手下駄、「盲」における琵琶は持物（じぶつ）とも考えられる。一方聾は聾者と思しき人物が対面相手との意思疎通に苦労している様子を描いており、一次不具聾に起因する二次不具「意志疎通の困難」を示唆しているものとも考えられる。このような描写は「寓意相」に与する換喩的図像とも考えられ、「対面」及び「耳や口を指すしぐさ」が重要な要素であるものとも考えられる。このような事例は聾と他の身体不具者の可視化事象（描写）における様相の相違、ひいては当時の社会の身体不具者における多様な視点を窺わせるものがある。

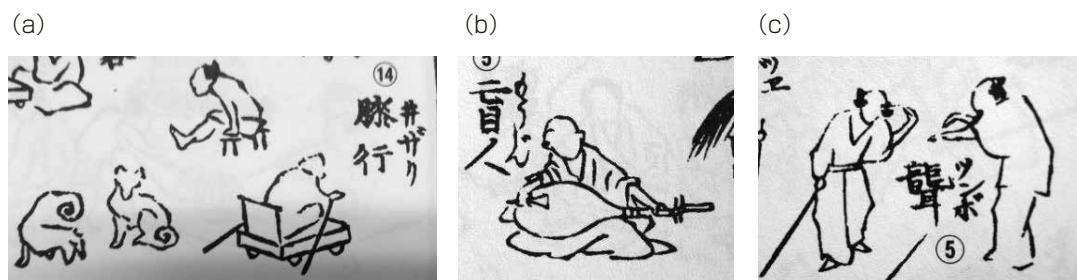


図22 『画本早引』所収不具表象 (a)「膝行」(前編3葉オ), (b)「盲人」(後編19葉ウ), (c)「聾」(前編22葉オ)。

2.5.3.《遊行上人縁起絵》

絵巻物《遊行上人縁起絵》の「尾張国甚目寺施行」には非人施行が描かれている。《遊行上人縁起絵》諸本のうち、金蓮寺本の巻3第1段には「尾張国甚目寺施行」の絵があり、一遍を始めとする時衆の僧たちが屯する輪に加えて、甚目寺の庭には乞丐僧の輪（僧輪）、乞丐非人の輪（乞丐輪）、そして癩者の輪（癩者輪）が描かれている（黒田1986）。このような4種類の輪の描き分けは中世日本の乞丐非人における身分制を可視化した興味深い事例として、さまざまな研究がおこなわれてきた（黒田1986）。この輪に焦点を当て、蹠跛表象および瞽盲表象と並立する聾聵表象を考証することにより、非文字史料における不具者表象の射程に聾聵表象を並立的に捉えていくことを試みた。

一遍の九州遊行の時の様子を綴った文献『一遍上人年略譜』³⁹や『一遍義集』⁴⁰の九州巡りに関する箇所には聾啞語彙が見られる⁴¹。そこで絵巻物《一遍聖絵》や《遊行上人縁起絵》に九州巡りに該当する絵画があるかどうかを調べた。建治二年前後の九州巡りは《一遍聖絵》巻4段段1段2に描かれている。段1は筑前国の武士の館を訪ねる場面、段2は大隅八幡宮参詣の場面である。段1及び段2において供養と思われる場面は描かれていない。段3は備前国藤井の場面であり、九州めぐりは段1及び段2のみで終わっていることが窺える⁴²。すなわち、聾啞語彙が見られる九州巡りに該当する場面は《一遍聖絵》や《遊行上人縁起絵》には描かれてはいないものと判断した。しかしながら、この文脈からは当時の乞丐非人集団においては瞽盲と聾聵はけっして非対称的な位置づけではなかったということである。すなわち、蹠跛表象に加えて瞽盲表象が見られる以上は、聾聵表象も可視化されていると見た方が自然であるものと考えられる。

《遊行上人縁起絵》写本群の原本自体は損失したものと見られているものの、奥付に1323年に描かれたことが明記されている真光寺本を始めとする写本や断簡が現存しており、その数は20数本に及んでいる（表2）。写本群の作成時期は14世紀初頭から江戸時代後期にわたっており、画風や描かれた内容によりさまざまな系譜が提唱されている。「尾張国甚目寺施行」場面を描いたものと見られる絵がある現存写本のうち、近代初期以前のものには、金蓮寺本の他に金光寺本、東博本、真光寺本、光明寺本、

39 『一遍上人年譜略』 丙子条 建治二丙子 同世八歳 今春出熊野山。任神教而巡行諸國賦算化益。三月下旬、至豫州度親類眷屬并國中。次移九州、謁聖達和尚。達大喜怡。信神教旨、拜受札矣。次詣大隅正八幡宮、念佛法樂、謝神恩。神以十言葉和歌、示傳一氣十念旨。自爾我宗有一氣十念傳。勸進國中、至豐後州。道俗隨逐、貴賤供養不可勝計。又聾盲瘡癩人乞匄等、爲受供養餘飯隨從。師哀之利化。至同國府中鶴見獄傍有溫泉。是熊野權現方便湯也。其比、鎮西下流眞教上人、住瑞光寺專說淨教。聞師化導、來而問答七日七夜、眞教竟閉口。歸依于師即作弟子。於之改名號他阿彌陀佛。第二祖是也。又溫泉傍、在權現宮。社頭有一楠木、師以小刀刻名號。其ノ歲既暮。別時念佛。

40 『一遍義集』 同三年秋比、九州豊後國府修業。歸伏道俗隨逐貴賤、不可勝計。其中或受念佛札歸私宅者アリ、或聞稱名勸望隨逐人モアリ進退任縁更貴賤不論。爰以多者臙盲瘡癩類、黑白癩病族、此等非人會雖無佛法之志、強因思施食殘東西集南北追來。

41 同時期の文献における聾啞語彙としては、『叢尊願文』（1269）「或有受盲聾報之者、或有嬰疥癩病之者、謂彼前業、則誹謗大乘之罪、雖歷泥裂、猶未盡、見其現報。爰有一靈場、稱曰般若寺、南有死屍之墳墓、爲救亡魂煤、北有疥癩之屋舍、得懺宿罪之便」や光明寺本《遊行上人縁起絵》巻第3第1段「耳の辺のこのの葉ハ、聾てきく声そなき」が挙げられる。

42 「第5章『一遍上人絵詞伝』における『一遍聖絵』の需要 2九州遊行」「中世遊行聖の図像学」、218-223。

表2 《遊行上人縁起絵》諸本

鎌倉後期に使用された桶の造形性『デザイン学研究』44(1), 53-62.						
	◎	一遍上人絵伝 絵円伊 (一遍聖絵)	12巻	観喜光寺 (京都)	鎌倉 (1299年)	13
	◎	一遍上人絵伝 絵円伊第7	1巻	東京国立博物館	鎌倉 (1299年)	13
	○	一遍上人絵伝 絵円伊	1幅	瀬津巖 (神奈川)	鎌倉 (1299年)	13
	○	一遍上人絵伝	7巻	前田育徳会 (東京)	鎌倉	14
	○	一遍上人絵伝	4巻	北村又左衛門 (奈良)	鎌倉	14
B		遊行上人縁起 (古縁起)		清浄光寺 (神奈川)	鎌倉	14
A	○	遊行上人縁起	10巻	真光寺 (兵庫)	鎌倉 (1323年)	14
A	○	遊行上人縁起	4巻 (巻3, 5, 6, 9)	金光寺 (京都)	鎌倉	14
	○	遊行上人縁起	1巻 (巻2)	金台寺 (長野)	鎌倉	14
非A, 非B	○	遊行上人縁起	4巻 (巻2, 5, 6, 8)	常称寺 (広島)	鎌倉	14
		遊行上人縁起	1巻	ニューヨーク公共図書館	鎌倉	14
A	●	遊行上人縁起	2巻	東京国立博物館	鎌倉	14
		遊行上人縁起	1巻	遠山記念館 (埼玉)	鎌倉	14
		遊行上人縁起	1巻	称名寺 (愛知)	鎌倉	14
		遊行上人縁起	1幅	大和文華館 (奈良)	鎌倉	14
		遊行上人縁起	1幅	フリア美術館 (米国)	鎌倉	14
		遊行上人縁起	1巻 (巻8)	金蓮寺 (京都)	鎌倉	14
A		遊行上人縁起	20巻	金蓮寺 (京都)	室町	16
A		遊行上人縁起	10巻	専称寺 (新潟)	室町	16
A		遊行上人縁起	10巻	清浄光寺 (神奈川)	室町	16
		遊行縁起	1巻	神奈川県立歴史博物館	室町	16
		浄阿上人絵伝	3巻	金蓮寺 (京都)	室町	16

「絵巻遊行上人縁起絵」『時宗の美術と文芸 一遊行聖の世界』128-143.						
A	●	遊行上人縁起絵	1巻 (巻7)	永福寺 (大分)	鎌倉	14
B	●	遊行上人縁起絵		光明寺 (山形)	江戸初期	16
B		遊行上人縁起絵 狩野養信筆模本		東京国立博物館		
B		遊行上人縁起絵		来迎寺 (新潟)	江戸中期	

- ◎国宝
- 重要文化財
- 1997年時点
- 2016年時点

【註】

- (1) 朱網掛けは今後の研究において用いることが望まれる史料のうち、鎌倉時代にしるされたもの、ないし鎌倉時代に描かれたものの様子をよく伝えているものと考えられるもの
- (2) 緑網掛けは今後の研究において用いることが望まれる史料のうち、室町時代にしるされたもの
- (3) 赤字は今後画像資料の入手が望まれる史料
- (4) A/Bは「絵巻遊行上人縁起絵」『時宗の美術と文芸 一遊行聖の世界』128-143に拠る。
- (5) 国宝及び重要文化財については、「鎌倉後期に使用された桶の造形性」『デザイン学研究』44(1), 53-62に拠り、2016年度時点における情報は緑で印した。

清浄光寺本がある。本稿では金光寺本⁴³ (図23a)、東博本⁴⁴ (図23b)、金蓮寺本⁴⁵ (図23c)、真光寺本⁴⁶ (図23d)、および光明寺本⁴⁷ (図23e) の計5件の画像資料を用いた。

聾は金光寺本では乞丐輪の左側および右下の箇所計4人、東博本では乞丐輪の左側に1人、同様に金蓮寺本でも乞丐輪の左側に1人描かれており、その配置はよく似ている。一方、真光寺本では聾は乞丐輪の左上に1名描かれている他、光明寺本では乞丐輪の右下に2名描かれており、配置状況は金光寺本、東博本、および金蓮寺本とはかなり異なっている。また、光明寺本には聾とは別に跛と思われる人物が乞丐輪の右上に描かれている。

盲は金光寺本では琵琶法師1名と供1名が乞丐輪の左側に、東博本では琵琶法師1名と供1名が乞丐輪の右下に、金蓮寺本では盲乞丐1名と供1名が乞丐輪の左側に描かれている。一方、真光寺本および光明寺本には盲人と覚しき人物は描かれていない。

(a)



(b)



43 黒田日出男 (1986) 『境界の中世 象徴の中世』 東京：東京大学出版会, p146.

44 e国宝 (<http://www.emuseum.jp/>) 一遍上人絵伝 (遊行上人伝絵巻). (2016年6月30日閲覧)

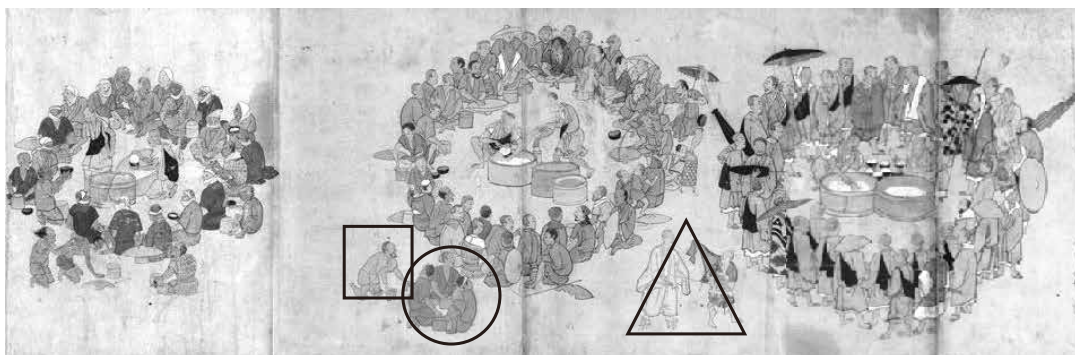
45 時衆の美術と文芸展実行委員会 (編) (1995) 『時衆の美術と文芸—遊行聖の世界』 東京：東京美術, p132.

46 東方書院 (編) 『日本絵巻全集 第9輯』 東京：東方書院, pp40-43.

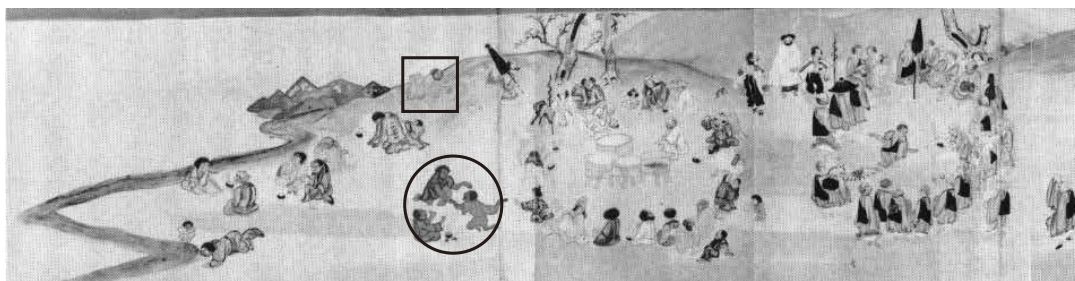
国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688652>) 56-59コマ. (2016年6月30日閲覧)

47 最上義光歴史館 (編) (2013) 『重要文化財 光明寺本 遊行上人絵』 山形市, pp34-36.

(c)



(d)



(e)



図23 《遊行上人縁起絵》「尾張国甚目寺施行」(a) 金光寺本, (b) 東博本, (c) 金蓮寺本, (d) 真光寺本, (e) 光明寺本、聾者と類推した図像は楕円、躄は四角、盲人および付き人は三角で囲んである。

躄跛表象および瞽盲表象に目を転じると、いずれも乞丐非人集団の輪の周縁に描かれていることがわかる。金蓮寺本の場合、乞丐非人集団の輪の周縁に描かれている人物は躄1名、盲1名および盲人の介助員1名の他には3名が見られる(図3)。この3人の人物はどうして乞丐非人集団の輪の中ではなく周縁に描かれているのであろうか。執筆者はこの3人の人物は聾者ないし啞者であり、躄跛表象および瞽盲表象に並立する不具者表象としての聾聵表象が可視化されたものであると類推した。

金蓮寺本の乞丐輪の描写全体及び乞丐輪の周縁に描かれている人物及び配置は金光寺本に酷似しており、金蓮寺本が《遊行上人縁起絵》原本ないし金光寺本を手本としたことが窺われる。一方、金光寺本における瞽盲表象は琵琶法師の形を採っているのに対し、金蓮寺本は盲乞丐の形を採っている。金光寺本が15世紀までには描かれたも

のと見られているのに対し、金蓮寺本は16世紀以降に描かれたものとみられている。この1～2世紀の間に当時の社会における瞽盲表象認識がかなり変化し、その変化が金光寺本及び金蓮寺本における瞽盲表象の違いに反映された可能性もあるものとも考えられる。また、真光寺本および光明寺本では瞽盲表象自体が採られていないことから、真光寺本および光明寺本は明らかに金光寺、東博本、および金蓮寺本の系統とは異なる系統であることが窺われる。

東博本では乞丐輪の下の部分（前景）に、蹠跛表象、聾聵表象、瞽盲表象がきれいに並んでいる様子が窺われる。一方、金光寺本の場合は、蹠跛表象の一部、聾聵表象、瞽盲表象が乞丐輪の左斜めの部分に固まっており、それらの不具者との均衡を図るために乞丐輪の右斜めの部分にも蹠跛表象が描かれたようにも見受けられる。したがって、東博本は《遊行上人縁起絵》原本ないし光明寺本を手本とするときに不具表象を整理するとともに更なる前景化を図った可能性も考えられる。

非人施行や一遍に関する文字史料に見られる非人および不具者関連記述を収集すると、『今昔物語集』「比叡山の僧心懐、嫉妬によりて現報を感じたる語」に見られる「不具者が癩者を差別する」という状況が鎌倉時代後期においても厳として存在していたことが窺われる。『養老令』の「戸令目盲条」における記述からも窺われるように、聾は不具者の中でも上位に置かれる傾向がある。それは見た目がいわゆる健常者と変わらないという「美学」的な問題も大きく絡んでいたのかもしれない。

2.6. 換喩／提喩

筆者はキリシタン資料対訳辞書群ないし洋学史料対訳辞書群に載録された聾啞関連語彙の調査を行い、その傾向を明らかにした。一方、幕末より明治時代初中期には図解辞典が刊行され、知識の啓発普及に寄与している。明治6年に刊行された『西洋画引（えびき）節用集』の見出し語には「盲」及び「聾」が輯録されている。「盲」の挿絵は盲人自身を描いていることが窺われるものの、「聾」の挿絵は戎（えびす）の面を描いている（図24）。大正時代までは関西地方を初めとする西日本においては戎が聾であることは広く知られており、「戎」が「聾」の換喩/提喩的図像として用いられたものと考えられる。このような事例は「盲」と「聾」の可視化事象における比喩の相違を窺わせる。

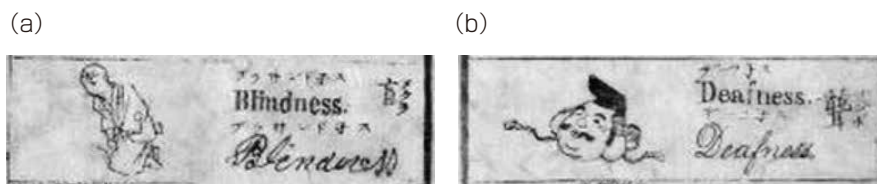


図24 『西洋画引節用集』(a)「盲」⁴⁸、(b)「聾」⁴⁹。

48 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/995288/28> 盲 (2016年6月20日閲覧)

49 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/995288/48> 聾 (2016年6月20日閲覧)

2.7. 聾啞表象の分節化

とりわけ『童解英語図会』の「啞」の挿絵は様々な意味で示唆的である(図25)。現在なら特にどうということも無いであろうが、当時は「啞」と「瘖瘂」がそれなりに区別されており、この挿絵もきちんと「耳」と「口」の両方を指して「(聾)啞」であることを示している。『童解英語図会. 初帙』には乞児の絵が描かれている。しかし同じ辞書では「聾」「啞」は『和漢三才図会』のように啞乞食ではなく一般町民の風貌で描かれている。このあたりに啞を取り巻く環境が江戸時代中期から幕末において相当変化したものと見なすことも可能であろう。



図25 『童解英語図会』(a)「聾」⁵⁰, (b)「啞」⁵¹

明治時代中期より昭和時代初期までは「聾啞学校」という名称が存在したこともあり、聾啞という語は不可分の関係にある語であるかのような錯覚を覚えがちでもある。『日葡辞書』には聾啞表象に関連する多様な語彙が採録されているが、その中に聾啞という語もある(17)。しかし、奈良時代に制定された『養老令・戸令』に記されている不具区分に関する規定では聾と啞は峻別されている(18)(松山2011)。また、中近世日本の文字史料においても聾啞という語の使用事例は少なく、「啞(おし、おふし)」ないし「聾(ろう、つんぼ、みみしい)」それぞれが文脈に応じて使われていた状況が一般的であったことが窺える。すなわち、聾啞は聾と啞という2つの語の複合語であり、聾啞表象も聾表象と啞表象に分節し各表象の分析を行うことが望まれるものとも考えられる。

聾表象及び啞表象は蹠跛や盲に比べると、視覚表象による有徴化及び認知性に乏しい傾向が顕著であり、そのような性質は非文字資料における聾啞表象の非表象化につながっていったものとも考えられる。一方、聾啞表象の不可視性は、蹠跛や盲には見られない多様な可視的指標を生むことになった。具体的な例としては、先述した聾札のような持物的要素の濃いものや身振りや手話といった手指表象、更には対面状況による換喩が挙げられる。また、『豊国祭礼図屏風』徳川美術館本「非人施行」におけ

50 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870175> 10/21 (2016年6月30日閲覧)

51 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870175> 10/21 (2016年6月30日閲覧)

る聾啞表象（物不言たちの描写）は、手指表象（伸ばした両手、対面）との複合により聾啞という非表象が可視化されるという文脈の存在を提示することになった。この文脈においては、一人の物不言の存在に内在する聾表象及び啞表象は不可視的（非表象的）であるものの、対面し身振りないし手話と言った手指表象を通して、聾表象と啞表象が多義的に外在化されるものとも考えられる。すなわち、手指表象は集団表象として認知されることにより、個人表象として位置付けられる聾表象ないし啞表象とは区別され得るものとも考えられる（赤須・木藤, 2004, 潮村・上田, 2004）。あるいは聾表象や啞表象は非表象でありながら手指表象の機能発現に寄与するものと見なすことも可能である。

聾表象及び啞表象は手指表象に比べ、医学的不具の程度に具体化される連続階調性が顕著であるのみならず、聾表象と啞表象の間には医学的に自明な因果関係が成立している。しかし、聾表象の可視化事象と啞表象の可視化事象における相関性については同一視することはできないものとも考えられる。一例として明治時代初期に刊行された図解英和辞典における聾啞図像を挙げ、聾表象ないし啞表象それぞれの可視化事象を検証してみる（図20）。見出し語「聾」の挿絵では、人物は耳のみを指差し、自身が聾であることを暗示している。それに対し、見出し語「啞」の挿絵では、人物は耳と口の両方を指し、聾に加えて啞であることを暗示している。すなわち、手指表象においては聾表象と啞表象は相加的効果を示しているものの、見出し語は「啞」とのみ書かれ「聾啞」とは書かれていないことより、文字媒体を介した表象においては「啞」が「聾」を内包する形になっているものとも考えられる。このような現象は生物界におけるエピスタシス（19）と相通ずるものがある。「聾」は必ずしも「啞」を並列的内包しないものの、「啞」は聾との因果関係を包摂する事象が見受けられ、この因果関係が強調されるときに「聾啞」という語が用いられるものとも考えられる。更に「啞」は音声言語を用い得ないという意味を有し、必然的に身振りや手話といった非音声言語に代表される手指表象との相互作用につながる。手指表象との相互作用を担っていたのは啞表象であったものとも考えられる。

近世以前においては、聾表象と啞表象は因果関係を有する事象であり、《豊国祭礼図屏風》徳川美術館本「非人施行」にも見られるように、聾啞表象は非人層においても周縁事象として位置付けられていた。しかし、近代日本（明治時代以降）において、聴覚不具児教育に携わる教育機関の名称が「盲啞学校」（20）から盲聾分離に伴い「聾啞学校」へと変わり、更に戦後は「聾学校」になった。しかし、現在は「日本手話」を中心に据えた「聾文化」という概念に則った活動の展開が見受けられる。このような事象聾文化と聴文化という二項対立的な把握体系を構築し、それを周りに拡げていくことで周縁事象を中心事象へと持っていこうと図るのは自己表象の中心化であるものとも考えられる。このような聾表象と手指表象の相互作用の顕現化という事象の変化の背景には、近代日本において聾表象と啞表象を二項対立的に捉え、啞表象の排除が行われたと見なすことも可能であろう（具体的な例としては手話教育の敵視及び口

話教育の推進といった聾啞教育史が挙げられる) (河内, 2012)。このように、聾表象及び啞表象とそれに基づく手指表象の相互作用においては「受容-客体」と「表現-主体」の問題が関わっているものとも考えられる。また、その過程で「啞者」を標榜せず、「聾者」を標榜する例が一般化した背景も後考が俟たれる。

聾表象及び啞表象は不可視性を内在した概念であり、手指表象という可視的指標に富んだ表象により可視化される。聾啞表象は3つの表象、聾表象、啞表象、及び手指表象の相互作用を包摂した表象空間を構成し、各位相の相互関係は各表象を取り巻く文脈により多義的かつ流動的に認知され得るものとも考えられる。このように、聾表象ないし啞表象の手指表象との構造的一環における定置を図った。しかし、今後も文字史料及び非文字史料を通じた聾啞表象という複合表象の分節化及び各表象の可視性及び認知性の現象論的顕在化の有無を考慮することが望まれる。中近世日本の非文字史料における聾啞表象の通時的考証を通して、聾啞表象の分析及び再構築を図ることにより、新たな時代の聾(啞)概念の模索を行うための一助となすことを期する。

3. 手話言語表象

現在は聾啞表象と手話言語は一体不可分の関係にあるとの見解が定着しているものの、近世以前の文字史料及び非文字史料における聾啞表象と手話言語表象の関係は必ずしも明示的なものではなかった。本章では日本の近代初期以前の非文字史料に見られる手話言語表象ないし手話表象の前駆となり得る手指表象の緝輯を図り、手話言語表象を内包する手指表象と聾啞表象の間テキスト性を考慮した図像解釈学的考証をおこなう。

3.1. 手話言語の二次元投影

手話言語には書記言語体系が存在しないとの見解が一般的ではあるものの、HamNoSys⁵²やSign Writing⁵³のような手話言語記述方法の開発もおこなわれている。また、身振りや手話言語の絵画や写真などによる描写もあり、このようなテキストを一括して非文字史料における手指表象ないし手話言語表象と見なす⁵⁴。音声言語の文字による記述は線条性を持つ零次元事象を二次元に投影する表象(音声言語の二次元投影)と考えられるのに対し、手話言語の記述ないし描写は三次元事象を二次元に投影する表象と考えられる(手話言語の二次元投影)。このように、音声言語の二次元

52 Hanke, T. (2004) HamNoSys - representing sign language data in language resources and language processing contexts, In: Streiter, O. & Vettori, C. (eds): *Workshop proceedings ELRA 2004*, 1-6.

53 Sutton, V. (2012) Who Uses SignWriting?, Signwriting.org. <http://www.signwriting.org/about/who/> (2016年6月20日閲覧)

54 手話言語体系における二次分節素は「手型(手形及び掌向)」「位置」「動作」に分類される。手話言語の描写は三次元表象の二次元投影という表象過程においては二次分節素「動作」の欠失が起こると共に、「手型」も簡素化される等、手話言語単語の言語的意味の把握が著しく困難になり、記述とは異なる位相を示すものと考えられる。

投影と手話言語の二次元投影には次元別移行という点において根本的な相違が存在する。

3.1.1. 次元別移行

音声言語の二次元投影においては、文字以外の媒体を用いて音ないし音声言語を可視化した例もある。例えば、《信貴山縁起絵巻》⁵⁵には犬が「ワン」と吠えている様子を表す線が書かれている（図26a）。また、空也像は念仏が口から出る阿弥陀仏で表現されており（図26b）、このような例は換喩的表徴化とも言える。一方、視覚媒体でもある文字は二次元世界を構築するものの、文字が示す内容は線条性の影響が濃い。しかしながら、そのような既成概念を打破するような「時間が二次元である小説」⁵⁶を作る試みも現れている（図26c）。絵画は典型的な二次元表象であるものの、そのような概念に異を唱えるような試みもある。例えば、浮世絵の両面摺《難波屋おきた》（図26d）や両面摺《高嶋おひさ》（図26e）は正面から見た絵と後方から見た絵を重ね合わせることでより三次元志向性を含意する描写を図っており、このような例は二次元半的描写と見なすこともできる。このような「次元別移行的可視化」という事象は手話言語という三次元表象を二次元に転写するときに生じる様々な現象を考察するにあたり有効な考察対象事象となり得る。

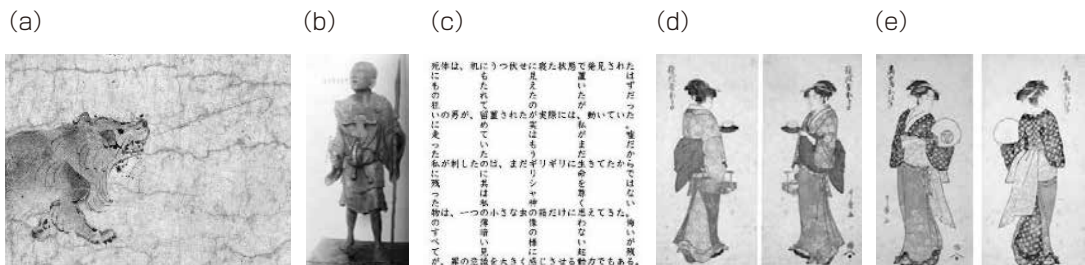


図26 次元別移行 (a)《信貴山縁起絵巻》「犬」、(b)空也像（六波羅探題寺蔵）、(c)時間が二次元である小説、(d)両面摺《難波屋おきた》両面摺《高嶋屋おひさ》。

3.1.2. 動きの描写

中近世日本の絵師は、動画的な視点により瞬間を捉えるのではなく時間の流れを捉える映像を描いていたものと見られ（高畑1999）、代表的な例として歌川広重の手になる浮世絵《大はしあたけの夕立》があげられる（図27a）。一方、《大はしあたけの夕立》が面を主体としつつ面と線をうまく組み合わせて動きを可視化しているのに対し、葛飾北斎の手になる浮世絵《神奈川沖浪裏》は線主体で動きを可視化しようとし

55 小松茂美(1987)『日本の絵巻(4)信貴山縁起』東京：中央公論社。

56 橋本幸士(Twitter：2016年4月28日 08：18)「時間が二次元である小説を書いてみた。空間が2次元(例えば地球の表面上)なら、目的地へ行くのに右の道や左の道の色々な経路を通れる。時間軸が2つある、というのは、この小説のようなものだろう。(超ひも理論知覚化プロジェクト)」

ている（図27b）。このような線と面の使い分けおよび相互作用は、手話言語表象における指差と掌の関係と通底するものがあり、後考が俟たれる。

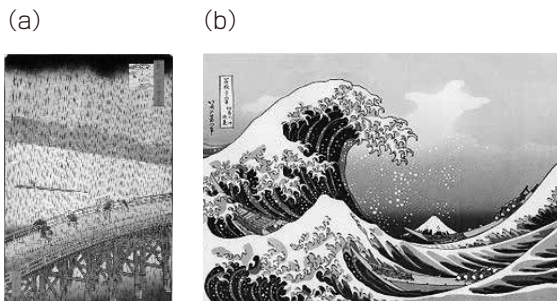


図27 浮世絵における動きの描写 (a) 歌川広重《大はしあたけの夕立》, (b) 葛飾北斎《神奈川沖浪裏》.

腕の描写

『Sachsenspiegel』

『Sachsenspiegel』における多腕像は対象物に対する指差の同時描写を図っているものと考えられるが、自我が確立されてはいなかったと見なされている中世西欧において、同一視点（視座）に基づく対象物指差の同時表現がなされたという見解も可能であるものと考えられ、このような描写は手話言語における動きの描写と通底するものが窺われる（図28）（末森）。



図28 『Sachsenspiegel』における多腕像⁵⁷

図29は聾啞ボクサー（James Burke）を描いたものである。しかしながら、この絵の観察者は手話を用いている様子を描いたものという印象を受けることは少ないものと考えられる。その理由としては描かれている人物がボクシングのファイティングポーズをとっていること、手が拳の形になっていることが挙げられる。このような描写は手話言語や手話で話し合っている聾者の様子に関する間テクスト性により、この絵は手話を使っている聾者を書いた者ではないという観察者の判断につながるものとも考えられる。

57 ハイデルベルグ大学所蔵

3.3.3. 聾啞表象と手話言語表象の相互作用

Corbett(1979)は近世初期に刊行された『Chirologia』⁵⁹や『Philocophus』⁶⁰の表題頁に描かれた聾啞者や指文字を含む画像の寓意・象徴等を解説している(図30a)。このような例は手指表象が聾啞表象を外在化すると共に可視化したものとも考えられる。しかし、指文字を含まない身振りや手話の描写の場合はどうか。中世写本『ラットレル詩篇(The Luttrell Psalter)』⁶¹では2人が対面して法的符牒(legal sign)を示し合っている(図30b)。この図像については様々な見解が提唱されているものの、手指媒体を介した意思疎通状況が「伸ばした両手」及び「対面」により有徴化された例との見解をとることも可能である。

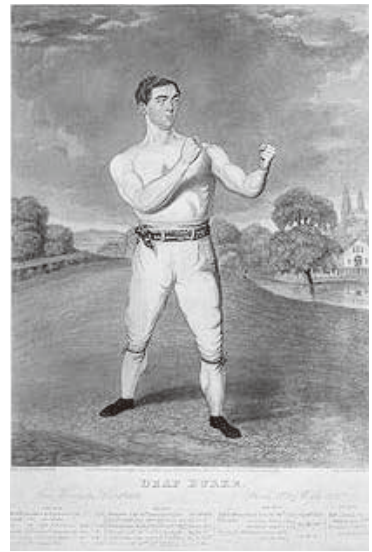
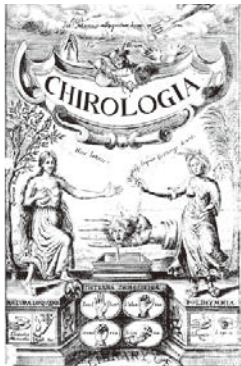


図29 ボクサーの描写⁵⁸

(a)



(b)



図30 (a)『Chirologia』の表題頁、(b)『ラットレル詩篇』f68上部

図31に示した2枚の聾啞学校の授業の様子を描いた絵はいずれも教師と複数の聾啞児を描いたものでありながら、相当異なった印象を与える。特に教師の手の描写に目を向けると、(a)が両手を前に伸ばしているのに対し、(b)は両手を下に伸ばしたままになっていることが窺われる。すなわち、(a)では教師は手話を使って授業をおこなっている様子が窺われるのに対し、(b)では聾啞児たちに口話を指導している様子が窺われる。

58 Henry Hoppner Meyer (painting) & Charles Hunt (engraving) (1839) "Deaf Burke".

59 John Bulwer (1644) *Chirologia*. London: Thomas Harper.

60 John Bulwer (1648) *Philocophus*. London: Humphrey Moseley.

61 The Luttrell Psalter: Psalm 103. Lincolnshire, c.1320-40 British Library Add. MS 42130 f68は下記のURLで閲覧できる:
https://imagesonline.bl.uk/?service=asset&action=show_zoom_window_popup&language=en&asset=17810&location=grid&asset_list=17810%2C17893&basket_item_id=undefined

しかし、このような推察は (a) が聾啞学校の授業の様子を描いたものという間テクスト性に付与されるものにすぎないという見方もできる。すなわち、この絵が聾啞学校の授業の様子を描いたものであるという情報がなければ、教師の両手の描写が手話を使っている様子を描いたものという推察にはつながらない可能性が高いということも考えていくことが望まれる。

(a)



(b)



図31 聾啞学校の授業 (a) The instruction of deaf students at the New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb in 1855,⁶² (b) Asylum for the deaf and dumb.⁶³

また明治39年の『日本新聞』掲載記事には第1回日本聾啞教育研究会の記事と共に手話で話し合う2人の人物が鮮明に写っている写真が掲載されている(図32)。この写真には「啞と手話」というキャプションがついている。この写真を掲載するにあたり、新聞の読者が最も手話での会話という文脈を把握しやすいような形態が選ばれた可能性があり、そのような形態の場合、上記の図像と同様に「伸ばした両手」と「対面」が主要要素として取り入れられることになったものとも考えられる。このように両手を伸ばした人物という描写は手話言語が描写されるときに主要なパターンであることが窺われる。

「啞の手話」及び「啞の二人泥棒」では両腕を前に伸ばしたとき(瞬間)の様子が掲載されている。当時の新聞関係者は手話の多様な動態を写真に撮ったものとも考えられるものの、最終的には似た動態を示す写真が掲載されたことは、対面し両腕を伸ばしている動態が最も「手話らしく見える」という視点の基に選ばれた可能性を窺わせる。このような事象は手話言語の2次元投影における観察相から寓意相への変化を窺わせるものがあり、手話言語の描写における相違に関する重要課題になるものとも考えられる。

62 <http://www.dailymail.co.uk/sciencetech/article-3345846/Sign-language-accent-Linguists-discover-variation-signing-seen-Philadelphia.html>

63 Joseph Hatton (1896) *Deaf and Dumb Land*, London: Asylum for the Deaf & Dumb.

(a)



(b)



図32 (a)「啞と手話」『日本新聞』明治39年10月17日 日本聾啞教育講演会(東京聾啞学校)において中垣内氏(聾啞者)と青山氏(聴者)が手話で話し合う様子を撮ったものであり、左図との類似性が認められる。(b)「啞の二人泥棒」『大阪朝日』明治44年。

筆者等は『豊国祭礼図屏風』の徳川美術館本及び豊国(とよくに)神社(じんじゃ)本の該当場面を検証し、同場面内に「対面し両腕を伸ばした人物」すなわち「手話もしくは身振りを抽出し寓意化した可能性のある描写」を見出した(図33)。上記の類推に則り『豊国祭礼図屏風(徳川美術館本)』の方広寺施行場面に見られる人物を腕の描写形式に沿って分類を通して、聾啞者が描かれることにより、方広寺施行場面における言語空間の非連続性を呈示する表象の可能性を見出した。このような表徴化は上述の《豊国祭礼図屏風》徳川美術館本「非人施行」における啞者群の比定と符合する。しかし、このような検証は、筆者の考えに沿った都合の良い図像を抽出し論じるという独り善がりのものという批判から免れることはできない。今後は文字資料との対照が可能な手話絵画を発掘し、手話を聴者の視点で描いたときどのような傾向が見受けられるのかを統計的に把握し、それを本稿における考証に反映させていくことが望まれる。手話が絵画ないし写真に描写されるとき(二次元への投影)、どのような現象が生じ、それが聾啞表象という現象においてどのような意味を持つのかを問うことは聾啞表象の本質の検証に関わる重要な問いでもある。



図33 徳川美術館本《豊国祭礼図屏風》「方広寺施行場面の一部(左隻五扇上部)」

一方《三十二相追加百面相》は明治10年から明治23年にかけて連綿と発行されており、図5gに示す「啞」の初出は明治16年と見られ、これが日本手話単語の図像の初出典拠と見なし得る。一方、図25に示す『童解英語図会. 3帙』の「聾」「啞」の挿絵

を手真似の描写と見なすならば、これが現存最古の日本手話単語の図像になる。この点についても後考が俟たれる。

手話辞書の挿絵は図説明文により醸し出されるパラテキスト性および観察者の手話言語習得といった間テキスト性の度合いにより手話言語の単語の二次元半的挙動への移行が生じ、記述性が前景化および固定化された例との見解を呈しうる可能性もある。これは観察相の寓意相への移行とはまた異なる次元別移行として把握することが望まれる。図像の呈示にあたりテキストの有無により、寓意・象徴ないし持物といった寓意相の依存度が変動する傾向が見受けられる。当時の絵画における「啞寓意」ないし「手話寓意」が存在した可能性を含め、啞者と手話の文脈的關係を検証するに辺り、非文字史料における手話描写事例の輯録及び図像学・表象学的検証を行っていくことが望まれる。

参考文献

- 赤須大典・木藤恒夫(2011)「集団表象と自己表象の一致性と集団同一視との関係」『久留米大学心理学研究』10, 31-38.
- 池上俊一(1992)『歴史としての身体 -ヨーロッパ中世の深層を読む-』東京：柏書房.
- 伊藤亜紗(2015)「障害と美学 -身体論的な観点から」『第66回美学学会全国大会』〈分科会E身体〉.
- 伊藤薺一(1941)『日本聾啞秘史 言はぬ花』東京市：教育研究会.
- 伊藤政雄(1998)『歴史の中のろうあ者』東京：近代出版.
- 潮村公弘・上田勝弘(2004)「内集団表象と外集団表象が社会的自己概念をどのように規定しているのか：Stroop Effect Technique を適用した検証」『人文科学論集. 人間情報学科編』38, 99-118.
- 岡村壽正(1989)『吉田松陰の啞弟 付風に起つ』熊本市：「行末川」出版部.
- 加須也誠(2012)『生老病死の図像学』東京：筑摩書房.
- 金井清光(2005)『一遍聖絵新考』東京：岩田書院.
- 河内重雄(2012)『日本近・現代文学における知的障害者表象—私たちは人間をいかに語り得るか』福岡市：九州大学出版会.
- 汲田克夫(1973)『「日本霊異記」の障害者観』『教育学論集』2, 120-128.
- 黒田日出男(1986)『境界の中世 象徴の中世』東京：東京大学出版会.
- 河野勝行(1987)『障害者の中世』京都市：文理閣.
- 小松茂美(編)(1978)『日本絵巻大成(別巻) 一遍上人絵伝』東京：中央公論社.
- 佐藤俊子(1985)「マルレ「タブロー・ド・パリ」(パリの情景)」『文化女子大学図書館蔵西洋服飾ブック・コレクション』90-91.
- 澤田和人(2004)「鉢叩の装いと鉦叩の装い 服飾の記号性と造形」『国立歴史民俗博物館研究報告』109, 95-125.
- 澁沢敬三(1984)『絵巻物による日本常民生活絵引』(新版) 東京：平凡社.
- ジャン=クロード・シュミット(著) 松村剛(訳)(1996)「第七章 身振りの言語」『中世の身ぶり』東京：みすず書房.
- 末森明夫(2012)「日本聾教育黎明期における指文字及び手真似文字の系譜」『日本手話学会第38回大会予稿集』.
- ・新谷嘉浩・高橋和夫(2013a)「聾啞図像学の構築 —中近世非文字史料の聾啞可視化事象における比喩および寓意」『日本障害学会第10回大会予稿集』.
- ・新谷嘉浩・高橋和夫(2013b)「手話言語の二次元投影におけるアポリア」『日本手話学会第39回大会予稿集』.
- ・新谷嘉浩・高橋和夫(2013c)「芸能《三人片輪》における聾啞表象」『第16回日本聾史学会埼玉大会予稿集』.

- (2016a) 「中世西欧写本群『ザクセンシュペーゲル』における多腕像の図像学的及びテキスト論的考証」『聾史研究』2, 23-37.
- ・新谷嘉浩・高橋和夫 (2016b) 「《豊国祭礼図屏風》「非人施行」における障害者表象及び聾啞表象」『障害学研究』11, (印刷中)
- 砂川博 (2007) 『中世遊行聖の図像学』東京：岩田書院.
- (2013) 『徹底検証 一遍聖絵』東京：岩田書院.
- 関根只誠 (編) (1925) 「大石真虎」『浮世絵百家伝』東京：六合館, 129-132.
- 高橋和夫 (2013) 「明治時代初中期における図解英和辞典類の聾啞図像」『聾史会報』42, 6-10.
- ・新谷嘉浩・末森明夫 (2014) 「「聾札」と「偽聾」」『聾史会報』44, 4-7.
- 高畑勲 (1999) 『十二世紀のアニメーション—国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの』東京：徳間書店.
- 谷合侑 (1996) 『盲人の歴史』東京：明石書店.
- 津名道代 (2005) 『難聴 知られざる人間風景 (下) 日本史に探る聴覚障害者群像』京都市：文理閣.
- 永井猛 (2002) 『狂言変遷考』東京：三弥井書店.
- 中野善達・加藤康昭 (1967) 『わが国特殊教育の成立』(1991年 改訂新版) 東京：東峰書房.
- 中山太郎 (1934) 『盲人史』(1976年 覆刻版) 東京：昭和書房.
- 花田春兆 (1997) 『日本の障害者—その文化史的側面』東京：中央法規出版.
- 松山郁夫 (2011) 「古代日本における福祉の考え方 —養老令における救済に関する規定を通して—」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』16 (1) , 207-215.
- 藤本清二郎 (2014) 「第5章 城下町世界の勸進者」『城下町世界の生活史』大阪市：清文堂出版, 175-218.
- 藤本敏文 (編) (1935) 『聾啞年鑑』大阪市：聾啞月報社.
- 武藤禎夫 (編) (1997) 『江戸明治百面相絵本八種』東京：印刷協進社.
- 山本正志 (2005) 『ことばに障害がある人の歴史をさぐる』京都市：文理閣.
- Allen, G. (2011) *Intertextuality* (2nd Edition) , London : Routledge.
- Bogdan, R. (2012) *Picturing disability : Beggar, freak, citizen and other photographic rhetoric*, Syracuse : Syracuse University Press.
- Bragg, L. (1996) Chaucer' s monogram and the "Hoccleve Portrait" tradition, *Word & Image*, 12 (1) , 127-142.
- (2004) *Oedipus borealis : The aberrant body in old Icelandic myth and saga*, Teaneck (USA) : Fairleigh Dickinson University Press.
- Camille, M. (1993) *Image on the edge : The margins of medieval art*, Harvard (USA) : Harvard University Press.
- Corbett, M. & Lightbown, R.W. (1979) *The comely frontispiece : the emblematic title-page in England, 1550-1660*, London : Routledge & Kegan Paul.
- Davis, L.J. (1995) *Enforcing normalcy : Disability, deafness, and the body*, New York : Verso.
- Dequeker, J. (1977) Arthritis in Flemish paintings (1400-1700), *British Medical Journal*, 1, 1203-1205.
- Fabry, G. & Vanopdenbosch, L. (2001) Hieronymus Bosch (1450-1516) : Paleopathology of the medieval disabled and its relation to the bone and joint decade 2000-2010, *Medical Archaeology IMAJ*, 3, 864-871.
- de Saint-Loup, A. (1993) Images of the deaf in medieval western Europe. In R. Fischer (ed.) *Looking back : a reader on the history of deaf communities and their sign languages (International studies on sign language and communication of the deaf, Volume 20)*, Hamburg : Signum-Verll, 379-402.
- Eyler, J.R. (ed.) (2010) *Disability in the middle ages : Reconsiderations and reverberations* (New Edition) , Abingdon (UK) : Routledge.
- Goodey, C.F. (2011) *A history of intelligence and intellectual disability : The shaping of psychology in early modern Europe*, Abingdon (UK) : Ashgate.
- Karcioglu, Z.A. (2002) Ocular pathology in the parable of the blind leading the blind and other paintings by Pieter Bruegel, *Survey of Ophthalmology*, 47 (1) , 55-62.
- Keeman, J.N.H. (2011) Brueghel' s cripples, *Nederlands Tijdschrift Voor Geneeskunde*, 155 (51) ,

A3750.

Metzler, I. (2013) *A social history of disability in the middle ages : Cultural considerations of physical impairment*, Abingdon (UK) : Routledge.

——— (2016) *Fools and idiots? : Intellectual disability in the middle ages*, Manchester (UK) : Manchester University Press.

Millett-Gallant, A. (2010) *The disabled body in contemporary art*, London : Palgrave Macmillan.

Nishimura, M. (2009) *Images in the margins*, Los Angeles : J. Paul Getty Museum.

Pokorny, E. (2003) Bosch' s cripples and drawings by his imitators, *Master Drawings*, 41 (3) , 293-304.

Rather, S. (1993) Stuart and Reynolds : A portrait of challenge, *Eighteenth-Century Studies*, 27 (1) , 61-84.

Scalenghe, S. (2014) *Disability in the Ottoman Arab World, 1500-1800*, Cambridge (UK) : Cambridge University Press.

Siebers, T.A. (2010) *Disability aesthetics*, Ann Arbor (USA) : University of Michigan Press.

Trentin, L. (2015) *The hunchback in Hellenistic and Roman art*, London : Bloomsbury Academic.

Turner, W.J. & Pearman, T.V. (eds.) (2011) *The treatment of disabled persons in medieval Europe : Examining disability in the historical, legal, literary, medical, and religious discourses of the middle ages*, Lewiston (USA) : Edwin Mellen Press.

Wright, D. (2011) *Downs : The history of a disability*, Oxford (UK) : OUP Oxford.